



市立大津市民病院
Otsu City Hospital

市立大津市民病院

Vol.180

2024年5月号

地域医療連携室だより

副院長就任のご挨拶

市立大津市民病院 副院長 こばし ひろあき 小橋 裕明



この度副院長を拝命しました整形外科の小橋裕明です。

私は京都府立医科大学を卒業後、大学病院および関連病院での勤務、整形外科専門医、学位、手外科専門医の取得を経て、2013年に当院に赴任させていただきました。以来、大腿骨近位部骨折をはじめとする、四肢骨折、外傷の手術症例、保存療法が適応となる高齢者の脊椎椎体骨折や、恥坐骨骨折の初期対応など、地域の先生方からご紹介いただいた症例を中心に幅広く診療させていただきました。また専門分野である手外科疾患においては、低侵襲である鏡視下手術に力を入れて参りました。

入職後10年目の2023年に診療局長を拝命し、医師大量離職後の人員不足とコロナ禍の混乱、疲弊から復活しつつあった診療局を、各診療科連携の調整役、取りまとめ役として微力ながら支えさせていただきました。

副院長の所管といたしまして地域医療連携を担当させていただくこととなり、これまでにも増して地域の先生方のご協力のもと、超高齢化社会における当院の役割を果たすべく取り組んで参る所存です。引き続きご指導のほどよろしくお願いいたします。

副院長 整形外科診療部長

- 手外科 日本整形外科学会専門医
- 関節外科 日本手外科学会認定手外科専門医・指導医
- 外傷 日本整形外科学会認定リウマチ医
- 日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医
- 日本整形外科学会認定運動器リハビリテーション医

皮膚科 ～近況のご報告～

もしアトピー性皮膚炎がなかなかよくならないとお困りの患者さんがおられましたら、是非当科にご紹介下さい。

平素より地域の医療機関の先生方におかれましては、患者様をご紹介いただき誠にありがとうございます。当院皮膚科は現在、男性医師2名、女性医師1名の3名体制で診療に当たっています。

近年の皮膚科分野での薬物療法の進歩には目を見張るものがあり、とくにここ数年で大きく治療法が変わったものとしてアトピー性皮膚炎があります。2021年のアトピー性皮膚炎ガイドラインでは、アトピー性皮膚炎とは増悪と寛解を繰り返す掻痒のある湿疹を主病変とする疾患であり、患者の多くはアトピー素因を持つと定義されています。厚生労働省の推計では国内におよそ125万のアトピー性皮膚炎の患者がいるとみられています。2018年以前のアトピー性皮膚炎の治療はステロイド外用薬やタクロリムス軟膏などの外用薬が主体の対症療法であり、どうせよくならないと印象が強かったかもしれません。しかし2018年以降、新たな外用薬（デルゴシチニブ軟膏、ジファミラスト軟膏）、生物学的製剤の注射（デュピルマブ、ネモリズマブ、トラロキヌマブ）やJAK阻害薬（バリシチニブ、ウパダシチニブ、アプロシチニブ）の内服薬が誕生してきました。さらに薬剤の対象も拡大しており、大人だけでなく、1歳未満の子どもにも使用が可能なものも誕生してきました。これらの薬剤をうまく使い分け、組み合わせることで2021年アトピー性皮膚炎ガイドラインに明記された治療の目標『症状がないか、あっても軽微で、日常生活に支障がなく、薬物療法もあまり必要としない』が達成可能なものとなってきました。治療達成のためにはできる限り早期に皮膚科の専門医に相談して、よりよい皮膚の状態にコントロールしていくことが重要です。当院ではすべての薬剤が使用可能であり、もしアトピー性皮膚炎がなかなかよくならないとお困りの患者さんがおられましたら、是非当科にご紹介下さい。紹介をご希望される患者さんがおられましたら当院地域連携室までご連絡いただければ幸いです。

当院は今後も地域の皆様のために全力で頑張ります。今まで変わらずご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



アトピー性皮膚炎 治療前

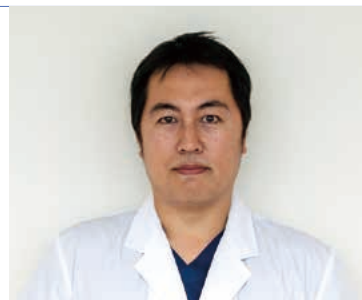


アトピー性皮膚炎 JAK阻害薬内服3ヶ月後

※臨床例の一部であり、すべての症例が同様の結果を示すわけではありません

皮膚科 診療部長 かんの さとし
貫野 賢

● 皮膚科一般 日本皮膚科学会専門医



Instagram



OTSUCITYHOSPITAL_OFFICIAL

HP



<https://och.or.jp/>

発行元

地方独立行政法人 市立大津市民病院
地域医療連携支援センター 地域医療連携室
Tel. 077-526-8192 (直通) Fax. 077-522-0192

業務時間

月～金曜日：午前8時30分～午後7時30分
土曜日：午前8時30分～午後12時30分